様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月６日現在

機関番号：３４５２４
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：２０１１～２０１２
課題番号：２３８９０２３５
研究課題名（和文）　地域高齢者に対する自殺予防の視点を備えた傾聴ボランティアの養成に関する研究
研究課題名（英文）
Study on Training Listening Volunteers from the Viewpoint of Suicide Prevention for Local Elderly People

研究代表者
竹内　美樹　（TAKEUCHI　MIKI）
兵庫大学・健康科学部・講師
研究者番号：６０６１１７７０

研究成果の概要（和文）：
自殺予防の視点を備えた「傾聴ボランティア」活動で、負担とやりがいを調査した。結果、負担なのは（1）うつ病等の知識が少ない、(2）活動中に起こったグループ内の問題等であった。やりがいは（1）感謝されてプライドが満足できる、(2）ボランティアに参加するとポジティブ思考になる、であった。
考察として、傾聴ボランティア養成講座の中で、うつ病等の病気の知識の時間数を増やし、対応法を習得してから実践に出ることが、不安軽減と活動継続につながることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：
We investigated the advantages and disadvantages of listening volunteer activities from the viewpoint of suicide prevention. The results show that the disadvantages are (1) little knowledge of depression, etc. and (2) problems within the group that occur during activities. The advantages were (1) pride can be met with appreciation and (2) participating as a volunteer is a positive concept.

As an observation, we showed that increasing the number of hours to gain knowledge on illnesses such as depression in listening volunteer learning courses, learning corresponding methods then putting them into practice are linked to reducing anxieties and continuing activities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
年度			
年度			
年度			
2011 年度	100,000	30,000	130,000
2012 年度	100,000	30,000	130,000
総　計	200,000	60,000	260,000

研究分野：医師薬学
科研費の分科・細目：看護、地域・老年看護学
キーワード：傾聴ボランティア、やりがい、負担感、自殺予防、うつ病、高齢者

１．研究開始当初の背景

わが国の自殺死亡者数は 1998 年に急増して以来、毎年 3 万人超で推移している。2008 年（平成 20 年）度の厚生労働省人口動態統計によれば、自殺死亡者の 37%が 60 歳以上の高齢者であったことから、高齢者のうつ病および自殺は深刻な社会問題であると考える。

2010 年、地域高齢者の自殺予防の視点を備えた「傾聴ボランティア」を養成した。1 年活動する中で、何とかやりがいにつながった人と、逆に活動が負担になった人に分かれた。そこでやりがいにつながった人と、活動が負担になった人の違いは何かを調査し、養成時の教育プログラムを提案したいと考えた。

２．研究の目的

2010 年、0 県の T 市社会福祉協議会と協力し、地域高齢者の自殺予防の視点を備えた、地域住民による「傾聴ボランティア」の養成に関わった。これは地域住民の支え合いの一環であり、身近なボランティア活動の予定であったが、実際には地域住民にとって自殺予防を担うことは荷が重い様子であった。

このためか、活動を始めた当初は緊張感および不安感がとても強かった。1 年活動する中で、何とかやりがいにつながった人と、逆に活動が負担になった人に分かれた。負担になった要因として、うつ病高齢者への対応のわかりづらさ等の知識の不足および支援体制の欠如が予測された。

そこで活動が負担になった要因およびやりがいと感じた要因を明らかにし、「傾聴ボランティア」養成時にどのような教育プログラムが必要か、提案することを目的とした。

３．研究の方法

(1)本研究は、0 県で傾聴ボランティア養成講座を受講し、卒業したメンバーで結成した傾聴ボランティアグループ（2009 年結成）で、メンバーは 32 人（男性 2 人、女性 30 人）、活動歴 3 年である。養成講座は講義 4 時間、ロールプレイ 6 時間、実習 1 時間で構成され、この講座の出席率は 90%であった。傾聴ボランティアグループの活動は、3 人 1 組で特別養護老人ホーム、認知症グループホームおよびデイサービスへ定期的に行き、1 回 1 時間程度の傾聴を行っている。

今回は、メンバー内に男性が少ないため、男性を除外した女性 30 人を分析対象とした。平均年齢は、60.3±10.6 歳であった。

(2)調査方法

調査期間：2011 年 4 月から 2012 年 3 月

調査内容：傾聴ボランティアグループが活動終了後に会長へ提出した活動記録 281 部を分析した。

倫理的配慮：調査対象者に対し、本研究の協力と説明を行った。調査依頼書には、調査の目的、プライバシーの保護を明記し、同意書に署名を得た。

(3)分析方法

傾聴ボランティアグループの活動記録の内容で、傾聴ボランティア活動で「負担」と感じたこととして意味ある文脈を抽出してコード化し（生データ）、同じ内容を意味するものを集めてサブカテゴリー化した。さらに意味の類似するサブカテゴリーをまとめカテゴリーを生成した。

同様に、傾聴ボランティア活動で「やりがい」と感じたこととして意味ある文脈を抽出してコード化し（生データ）、同じ内容を意味するものを集めてサブカテゴリー化した。さらに意味の類似するサブカテゴリーをまとめカテゴリーを生成した。

４．研究成果

(1)傾聴ボランティア活動で「負担」と感じたこととして抽出できたのは3項目（コード：726）だった。カテゴリーは7、サブカテゴリーは25だった。

①【自分自身の問題】;〔傾聴のテクニックが未熟：193〕は、8つのサブカテゴリーで構成されていた。これらは、「平等に会話できない：57」「次の人へ移るタイミングがわからない：45」「会話が続かない：31」「話題を見つけられない：28」「複数の人と会話するやり方がわからない：15」「傾聴を希望しない人への対応がわからない：9」「表情が読めない：4」「同じことしか話さない人への対応がわからない：4」であった。〔知識不足：151〕は、「認知症高齢者への対応が難しい：101」「うつ病高齢者への対応が難しい：50」であった。〔自信がもてない：89〕は、「役に立てているか自信がない：65」「相手に気をつかわせている気がする：24」であった。〔自分の癖：37〕は、「自分の考えを押し付ける：31」「異性の傾聴が苦手：6」であった。

②【活動中に起こった問題】;〔グループ内での問題：121〕は、「活動を欠席のときの対応が困る：77」「活動人数が少なく負担が大きい：31」「私生活とのバランス：8」「活動記録が苦痛：5」であった。〔活動中の問題：98〕は、「施設とのトラブル：34」「職員がいないときの対応：26」「傾聴の希望者が多くて対応しきれない：25」「職員からどう思われているか：13」であった。

③【倫理に関する問題】;〔倫理に関すること：37〕は、「プライバシーへの配慮：20」「死についての対応：17」の2つのサブカテゴリーであった。

(2) 傾聴ボランティア活動で「やりがい」と感じたこととして抽出できたのは2項目（コード：341）だった。カテゴリーは4、サブカテゴリーは14だった。

①【プライドの満足】;〔役に立っている：121〕は3つのサブカテゴリーで構成されていた。これらは、「表情が穏やかになった：88」「その瞬間だけでも喜んでもらえた：26」「周囲の人が聞き飽きた話を聴いて感謝された：7」であった。〔充実感がある：109〕は、「感謝された：31」「笑顔をもらえた：25」「訪問を心待ちにしてくれている：22」「満足感がある：20」「元気がもらえる：11」であった。

②【ポジティブ思考】;〔自己成長の場：100〕は、「人生の勉強：47」「学習意欲の向上：32」「自分の生き方を見直す：21」であった。〔ライフワーク：11〕は、「自分のため：9」「身内の傾聴を見直す：6」「孤立予防：3」の3つのサブカテゴリーであった。

まとめると、「負担」と感じた 3 項目は、①うつ病等の知識が少なく未熟と感じる、②活動中に起こったグループ内の問題、③対象者が亡くなった際の倫理的問題であった。「やりがい」と感じた 2 項目は、①感謝されてプライドが満足できる、②ボランティアに参加しているとポジティブ思考になる、であった。

考察として、活動に障害となっていた主は、うつ病等の知識不足およびグループ内の活動ルールの混乱であり、活動を継続するモチベーションは感謝の言葉等の心理的報酬を受けることであった。

傾聴ボランティアを継続するための提案としては、①傾聴ボランティア養成講座の中で、うつ病等の病気の知識の時間数を増やし、対応法を獲得する、②毎年傾聴技術のスキルアップ研修を行う、③グループ内の活動ルールの整備を行う、④グループの定例会で自分たちが評価された活動内容を共有するである。

今回の研究結果を元に、地域高齢者の自殺予防の視点を持った傾聴ボランティアを全国に養成していけば、自殺および孤立死が減少するのではないかと考えた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 竹内美樹、傾聴ボランティア活動を実践して「やりがい」と感じたこと、医学と生物学、査読有、157(4)、2013、439-443
② 竹内美樹、傾聴ボランティア活動を実践して“負担”と感じたこと、医学と生物学、査読有、157(1)、2013、75-79

６．研究組織
(1)研究代表者
竹内　美樹（TAKEUCHI　MIKI）
兵庫大学・健康科学部・講師
研究者番号：６０６１１７７０